

學術用語集

機械工学編

社団法人 日本機械学会発行

学 術 用 語 集

機 械 工 学 編

JAPANESE SCIENTIFIC TERMS
MECHANICAL ENGINEERING

COMPILED BY
MINISTRY OF EDUCATION
JAPAN

東 京

社団法人 日本機械学会

JAPAN SOCIETY OF MECHANICAL ENGINEERS

1 9 5 9

学術用語集 機械工学編

MEJ 8718

昭和30年3月20日 初版発行

昭和34年9月25日 5版発行

著作権所有 文 部 省

東京都千代田区丸ノ内2の2
丸ノ内ビルディング 561区

発行者 社団法人 日本機械学会
代表者 大 越 諄

印刷者 株式会社 技 報 堂
代表者 大 沼 正 吉

発行所 社団法人 日本機械学会
東京都千代田区丸ノ内2の2
丸ノ内ビルディング 561区
振替口座番号 東京 19018 番

発売所 株式会社 技 報 堂
東京都港区赤坂溜池町5
振替口座番号 東京 10 番

¥ 375,00

序 文

わが国における複雑多様な学術用語を整理統一する必要は、古く明治・大正のころから唱えられ、当時すでに理・工学関係の用語集を編集・刊行した学会もあり、さらに昭和にはいつてからは、工学・医学の一部の分野については、政府や学会の手によって標準用語集の刊行されたこともあった。

昭和21年11月、政府は、「国民の生活能率をあげ、文化水準を高める」ために「当用漢字表」と「現代かなづかい」を告示し、各官庁においてこれを使用するとともに、広く各方面にこの使用をすすめたのであるが、これを契機として、学術用語を平易・簡明なものに統一することが、学界・教育界の各方面から、改めて要望されるにいたった。

そこで文部省では、昭和22年2月、当時の学術研究会議に学術文献調査特別委員会学術用語制定科会を設けて、新学術用語制定のための調査審議に着手した。その後、行政機構の改革により、この事業は文部省の学術用語調査会に受け継がれ、さらに昭和24年7月以降、この調査会は文部省学術奨励審議会学術用語分科審議会と改称して、引き続き審議にあたり今日に及んでいる。

この事業は幸いに、関係学会・団体の全面的な協力のもとに、今回上記審議会において各学術分野ごとに成案がまとまったので、これを文部省において編集し、順次「学術用語集」の各編として刊行することにした。

なにぶん、新用語の制定は、各一語一語につき慎重な検討を経るすこぶる煩雑な作業を必要とし、そのため、審議にあたった関係の委員・専門委員は、想像以上の苦労を重ねられた。本書の刊行に際し、これら関係各位の多年の努力と熱意とに深く謝意を表する次第である。

もとより、学術用語の制定と称しても、今回制定した用語を、政府において一般にその使用を強制しうるものではない。しかし、学術用語を簡易・統一化し、これが広く使用されることは、政府としても強く希望するところであり、そのために、この事業を多年にわたって遂行してきたのである。また、日本学術会議においても、昭和26年11月第11回総会で、「学術用語の制定のことは、学問の進歩とその正しい普及にとってきわめて重要なことであるから、現在文部省学術用語分科審議会において実施している事業は、これを完成にいたるまで必ず継続されたい。」と議決し、政府に要望されたの

である。

ここに刊行する用語集は、その制定の方法と手続において、当該分野の専門学会はもとより、関係諸学会の意見をじゅうぶんに組み入れるよう最善を期したつもりである。

本書を通じて、新用語が学界・教育界さらに広く一般社会に普及徹底し、国民各層に使用されることによって統一の目的が達せられ、研究・教育また社会生活上に多くの利便がもたらされることを念願してやまない。なお政府は、昭和29年7月8日の次官会議において、「今後、各省庁において使用する専門用語は、文部省編集の学術用語集に記載されているものを基準として、これに統一するよう努めること。」を申し合わせ、率先して新用語の使用に努めることになった。ここに本書刊行の経過と趣旨とをしるして序とする次第である。

昭和 30 年 3 月

文部省大学学術局長

稲 田 清 助

まえがき

わが国の学術用語の多くは、海外からの近代科学の移入や、その後におけるわが国の学問の発達に伴い、各時代の必要を満たすために、多くの先覚者が苦心を払って作り上げたものであり、いわば時代とともに生れてきたものである。

したがって学問の分野によっては、用語の関連が失われたり、種々難解な漢字の使用や重複・不統一があったりして、専門家の間にさえ混乱を招き、時としてそのため事実が誤解されるおそれさえ生じたのである。戦後、漢字・かなづかいの簡易化が推進されるとともに、学術用語についても、新時代に適応する平明な用語に統一しようとする機運が、各方面に高まったのは当然のことであった。

当審議会は新しい学術用語の制定に関し、文部大臣の諮問を受け、昭和22年自然科学関係の用語から調査審議に着手し、昭和25年には人文科学の一部にも手をひろげて、目下なお審議を進めている。

この事業の遂行に際し、審議会は次のような方針をとった。

第1に、審議会は、新用語の制定は関係学会の意見に基いて決定すべきことを認め、審議会委員の構成については、関係の学会・協会の意志がじゅうぶん反映しうるよう配慮した。すなわち、自然科学部門については、現在までに、数学・物理学・化学・動物学・植物学・地学・機械工学・電気工学・土木工学・建築学・採鉱冶金学・船舶工学・農学・医学および工業技術関係用語の調整のため、特に工業標準用語ならびに映画技術につきそれぞれ専門部会を設け、また人文科学部門についても、経済学・宗教学・図書館学・法律学政治学・心理学の専門部会を置いているが、これら部会の委員は、関係の学会・団体を代表する委員をもって組織する方式をとった。したがって審議会は現在委員38名、専門委員355名をもって構成し、運営されている。また各専門学会の調整連絡にあたるためには、事業に着手した当初は各専門部会の主査をもって主査部会を構成したが、昨年7月にこれを廃止して審査部会がこれにあたることにした。ただし、以上の各専門分野においては、各学会の事情もあって、同一步調をもって並行的に作業を進めることができないで、進度はまちまちとなり、その点すこぶる苦心を要した。

第2に、審議会としては、学術用語の整理につき、一般方針を次のように

定めた。

1. 用語は平易・簡明で理解しやすく、かつ語感のよいものを選ぶこと。
2. 普通に使用される慣用語は、はなはだしく不合理なものでないかぎり、これを尊重すること。
3. 国語を尊重すること。

俗語でも適当と考えられるものは、用語中に採録すること。外国語ですでに慣用されているもの、もしくは国際的用語となっているもの、または適当な訳語のないものはむしろこれを尊重すること。

4. 略語・略称であっても、普通の慣用語となっているものは採用することとを妨げないが、極端に符号化したものは避けること。
5. 同音異義の用語（特に漢語）は、つとめて避けること。
6. 意味のない漢字の使用（特にあて字）は、つとめて避けること。
7. 用語については、大要次の方針によること。

1) 漢字は、当用漢字表（昭和21年11月16日付内閣訓令第7号および内閣告示第32号）によること。したがって、同漢字表にないものは書き改めるか、または他の語に言いかえること。

2) かなづかいは、現代かなづかい（昭和21年11月16日付内閣訓令第8号および内閣告示第33号）によること。

3) 外国語の表記は、かたかな書きを原則とし、大要文部省所定の「外国の地名・人名の書き方」を準用すること。

4) 用語のローマ字書きは、「ローマ字のつづり方」（昭和20年12月9日付内閣告示第1号および内閣訓令第1号）の第1表に掲げたつづり方によること。

5) 送りがな、その他の表記に関しては、大要文部省所定のものによること。

以上のほか学術用語の表記の問題については、なお当審議会として国語審議会の意見を聞き、以下のような回答があったので、それによることにした。

1. 外国語・外来語の表記について

a) 外来語をかな書きにする場合、さしつかえないかぎり、「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」・「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」の代りに、「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」・「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書く。

b) 外来語をかな書きにする場合、さしつかえないかぎり、「ティ」「ディ」の代りに、「チ」「ジ」と書く。

- c) 外来語および外国語の地名・人名をかな書きにする場合、原語のつづりにおける ia の a は、原則として「ア」と書く。
- 2. 英語語尾の長音符号について
原語のつづりの終りの er, or, ar などを書きにする場合には、長音符号「ー」を用いる。ただし、省く慣用のあるものや、これから造る術語では、必ずしもつけなくてよい。
- 3. 術語のかな書きと送りがなについて
 - a) 特に術語であることを明らかにしたい場合には、かな書きの部分はかたかなにしてもよい。
 - b) 術語の送りがなは、難読・誤読を避けるに必要なかなを送る。

第3に、用語制定には、次のような手続をとった。

- 1. 各学会を中心として、それぞれの分野の主要な著作・辞典から、最近の科学の進歩に相応じうるような、最も総合的な用語集を作るよう配慮して、用語を採録・収集する。
- 2. 各専門部会で、この採録・収集した用語を、前記の整理方針により改訂・整理する。
- 3. 専門部会相互の間に意見を異にするものは、関係の専門部会で調整し、またできるかぎりその原案を印刷に付して世論に問い、再調整を行う。
- 4. この結論を国語審議会に連絡して、国語改善の見地から審査を願う。
- 5. 審査されたものを総会に付議して制定案を決定し、文部省に答申し、文部省はこれを編集・刊行する。

当審議会としては、学術用語制定の重要性にかんがみ、以上のように慎重な方策・手続をたてて事にあたったが、上述のように各分野の歩調を整えることはきわめて困難で、かつ、わが国で自然科学および人文科学の両分野にわたり、このように学術標準用語が制定されることは、はじめてのことであり、しかも用語は生きたものであるので、一挙に完全を期するわけにはいかなかった。特に次の3事項については、厳格に一定することは困難であると認めたので、用語集のものをそれぞれの部門において標準とするが、以下のように決定した。

- 1. 送りがなをつけるか否かは、読み誤らないことを判断の目安としたが、送っても送らないでも、誤りではないことにする。
- 2. 英語語尾の長音符号「ー」は、用いても略しても、誤りではないことにする。

3. 用語を、かたかなで書いてもひらがなで書いても、誤りではないことにする。

この用語集にも、なお改訂を要するものや、学問の進歩とともに追補すべき新用語が少なからずあると思われるが、これらの点は後日いっそうの改良を加え、版を重ねるにつれて、名実ともにわが国の学術標準用語集として權威を高めることを期したい。

願わくは、利用者各位におかれても批判・検討を加えられ、ふじゅうぶん、不適當な箇所を惜しみなく指摘されるよう切望する次第である。

なお、以下に当審議会の委員の氏名をしるす。

(五十音順、○印は主査委員)

会長

有 光 次 郎 国語審議会委員

副会長

○岸 本 誠 二 郎 京都大学教授 (経 済 学)

○服 部 静 夫 東京大学教授
国語審議会委員 (植 物 学)

○福 田 武 雄 東京大学教授 (土 木 工 学)

委 員

青 木 楠 男 早稲田大学教授

○朝 倉 希 一 神奈川大学教授 (工 業 標 準)

○石 黒 浩 三 東京大学助教授 (物 理 学)

○彌 永 昌 吉 東京大学教授 (数 学)

岩 淵 悦 太 郎 国立国語研究所
研究第一部長

漆 原 義 之 東京大学教授

○大 塚 節 治 同志社大学教授 (キリスト教学)

大 浜 信 泉 早稲田大学総長

○緒 方 富 雄 東京大学教授
国語審議会委員 (医 学)

○竈 木 外 岐 雄 宇都宮大学長 (農 学)

木 村 健 二 郎 東京大学教授

金 田 一 京 助 国学院大学教授
国語審議会委員

○桑 田 勉 東京大学教授 (化 学)

河野庸雄	東京大学教授	
○下村彌太郎	東京大学教授	(採 鉱 ヲ 金 学)
○下元連	下元建築事務所長	(建 築 学)
○函師督	東京農工大学教授	(機 械 工 学)
○高木貞二	東京女子大学長	(心 理 学)
○竹脇潔	東京大学教授	(動 物 学)
田宮猛雄	日本医師会会長	
堤秀夫	早稲田大学教授	
○坪井誠太郎	東京大学教授	(地 学)
○土井重義	日本図書館 学会常任幹事	(図 書 館 学)
土岐善麿	国語審議会会長	
野口彌吉	東京大学教授	
原富男	東京教育大学講師 国語審議会委員	
○檜垣麟三	東京医科歯科大学教授	(歯 学)
福田敬太郎	神戸大学教授	
○山口益	大谷大学長	(仏 教 学)
○山高五郎	日本船舶工業 標準協会主事	(船 舶 工 学)
○山内二郎	東京大学教授	(電 気 工 学)
○横田喜三郎	東京大学教授	(法律学政治学)
吉川幸次郎	京都大学教授 国語審議会委員	
渡辺定	成城大学教授	

昭和 30 年 3 月

文部省学術奨励審議会学術用語分科審議会

会 長 有 光 次 郎

主査のことば

学術用語が限られた分野のみの専用語であることは現代には通用しない、昭和 22 年学術用語の制定の議が起るに及んで、機械部門においては特に関連する分野が広いので、関係学協会に協力を得て、当時の学術研究会議に次の委員構成による学術文献調査特別委員会学術用語制定科会が設けられ、現在の機械用語専門部会における学術用語の制定の事業に着手した。その後昭和 24 年にはこの用語制定科会は、文部省学術用語調査会に発展解消し、さらに文部省学術奨励審議会学術用語分科審議会に受け継がれて今日に至った。

日本機械学会	図 師 督・川 田 正 秋
精 機 学 会	青 木 保 雄
化学機械学会	藤 田 重 文
日本冷凍協会	長 岡 順 吉・加 茂 正 雄
農業機械学会	広 部 達 三・前 田 房 夫
造 船 協 会	故 湊 一 磨
日本鋁業会	下 村 彌 太 郎
映画機械協会	帰 山 教 正
織 維 学 会	石 川 章 一
科学測器学会	西 田 正 孝
自動車技術協会	吉 城 肇 蔚
土 木 学 会	井 口 昌 平
衛生工業協会	神 津 民 一 郎
運輸省工作局	橋 本 清・多 賀 祐 重
工業標準用語調査会	故 和 田 小 六・横 山 不 学
	東 秀 彦・尾 上 清 治 郎

過去において、公的団体が機械用語を採りあげて刊行したものには、日本機械学会の「機械工術語集」(昭和 7 年)、内閣資源局の「機械標準用語集」(昭和 10 年)、日本工学会の「工学共通用語」(昭和 14 年)などがあり、昭和 17 年には全国科学技術団体聯合会の標準用語整備委員会第 7 専門委員会により、機械関係標準用語原案ができあがっている。

部会ではまずこの原案に基づいて審議を重ね、その成果を一応まとめて「新制

機械用語集」(昭和 25 年、南江堂発行)として刊行し、世論に問うた。その後、時の経過になお多くの加えるべきものがあり、さらにまた特に発展を遂げた部面関係の用語も多くなったので、これらをできるだけ追加して、ここに用語選定を終わったわけである。その間、常に関係諸部門ならびに国語審議会と連絡・調整を行ったことはいうまでもない。

広範な機械関係の事物に対して、漏れなく用語を盛ることはほとんど不可能事に近い。そこで限界を機械工学を専攻する人々の利用のためとし、また後進にこれまでのような用語の混乱をふたたび残すまいとするところに目安を置いた。

ことばの伝達方式は、ようやく目からするよりも耳からする面に度を増すようになりつつある過渡期において、漢字表現に育成されたこれまでのことばには、これからのことばとしての問題を少なからず含んでいるが、一応当用漢字の範囲で処理した。しかし漢字をたよりとしてのみ流通するものは、しばしば漢字制限の壁に突きあたらざるを得なかった。そのため漢字のぬけがらのような用語もいくらか残った。

選定にあたっては新たな創作はつとめて避けて、やや不適当な表現でもこれまでの言い習わしに従うこととし、その反面きわめて適切な表現でも現代人にはそのいわれを説明しなければ通じないようなものは割愛した。けだし、ことばはその本質上、理屈の上でできるものでなく、互の申し合せに従って、慣れによって生命が生じ、理解される現実を確認すべきであると考えたからである。

形式・機能・用途に応じ、事物が細分される段階で複合語ができてくる。多くは形容詞をもって複合語の形をとるが、これらは代表的なものを例示することによって用語集としての目的を果した。他方、専門部門でしばしばくり返されるために、形容詞が除かれたまま、一般的な用語が専門用語とみなされる場合も多く見受けられる。一応は断って掲げるべきであるとして臨んだ。

学術用語の多くは、その対象が外国から移されたものが少なくない。したがって、外国語を対照することが用語の内容を説明する役目になる。相当する米英語を対照させたのはその意味であって、ややもすると学術用語の選定、すなわち外国語の翻譯と誤認されないように望みたい。この意味で本集も和英・英和辞典ではない。

ことばといわずすべて物事は、過去の人々の努力の上に積み重ねられて発展を遂げている。比較的早くから用語に関心が払われ、慣された機械工学部

門において、にわかに用語を変えることはかえって混乱をきたすおそれのあるものがあり、しばらく一般方針に従い得ないものがあつたことを断っておきたい。たとえば、外来語の語尾の長音符号は、3 字音以上は付けない原則を採っている。また「管」・「板」などのように訓読み・漢字音読み、いづれにも慣用されていて一律に決しがたいものは、訓読みを生かした程度で掲げ、清濁音の読み分けも一応習慣によつた。送りがなも訓読みを助けることに主点を置いて付け、誤読しないためのものとした。

ことばは時代とともに生きている。また日進月歩の今日、新事物に対して常にことばが伴わなければならない。こういう場合、一応現在制定されたことばを省み、その筋道に添うようにすることを望みたい。

本用語集が、委員各位の多年の献身努力によって世に出ることはいうまでもないが、その陰において原案選定に尽された日本機械学会はじめ関係学協会所属委員会の各位、さらにまた意見を寄せられた一般の士の協力に感謝せざるを得ない。これら多くの人々の御親切な協力の累積の上に本書が成つたことを特記しておきたい。

また本書の出版については、文部省の関係各位、特にその編集について学術課の青戸邦夫氏、国語課の広田栄太郎・天沼寧の両氏、ならびに日本規格協会の尾上清治郎氏が多大の努力を払われたことをしるして謝意を表する。

昭和 30 年 3 月

文部省学術奨励審議会 学術用語分科審議会
機械用語専門部会

主 査 図 師 督

例 言

1. 第1部（和英の部）においては、第1列に用語のローマ字書き、第2列に用語、第3列に用語に対応する英語ををしるし、第2部（英和の部）においては、第1列に対応する英語、第2列に用語、第3列に用語のローマ字書きをしるした。
2. 排列は、第1部においては、ローマ字の字順 ABC 排列、第2部においては、用語に対応する英語の語順 ABC 排列によった。
3. 外国語の地名・人名などの固有名詞のローマ字書きは、用語のかな書きの発音どおりつづった。
4. 用語のかな書きの部分は、外来語はかたかな、その他はひらがなを用いたが、特に漢字の音読みをひらがな書きしたものは太字で示した。

たとえば、

zyanome-hurôto じゃの目フロート annular float

5. 用語に対応する英語以外の外国語は、イタリック体で示した。

たとえば、

technische Arbeit 工業仕事 kôgyô-sigoto

6. かっこその他の記号の用い方は、次のとおりとした。

(イ) []内は省略してもよいものを示す。たとえば、

yûkô[-tyok]kei 有効〔直〕径 effective diameter

(ロ) →は参照すべきものを示す。たとえば、

draught →draft

Cardan-dendô →Karudan-dendô

(ハ) 【 】内は説明ないし注記を示す。たとえば、

dead center 死点 siten
止りセンタ【旋盤】tomari-senta

A

aba	アーバ	arbor, arbour
abaraita	あばら板【造船】	floor plate
abura-ana	油穴	oil hole
aburaanatuki-kiri	油穴付きり	oil hole drill
aburabako	油箱	oil box
abura-bâna	油バーナ	oil burner
abura-bunriki	油分離器	oil separator
abura-burêki	油ブレーキ	oil brake
aburabuton	油ぶとん【軸箱】	lubricating pad
aburadame	油だめ	oil basin, oil reservoir, oil sump
abura-doren-ben	油ドレン弁	oil drain valve
abura-doren-kokku	油ドレンコック	oil drain cock
aburairi-kaiheiki	油入り開閉器	oil switch
aburakaki-ringu	油かきリング	oil scraping ring, scraper ring
abura-kanetuki	油加熱器	oil heater
aburakiri	油切り	oil thrower, slinger
abura-kokku	油コック	oil cock
aburakosi	油こし	oil filter, oil strainer
aburakuda	油管	oil pipe
aburakudatuki-kiri	油管付きり	oil tube drill
aburame-yasuri	油目やすり	dead-smooth-cut file
aburamizo	油みぞ	oil groove
aburanuki	油抜き	oil extractor
abura-peinto	油ペイント	oil paint
abura-ponpu	油ポンプ	oil pump
abura-reikyakuki	油冷却器	oil cooler
aburasasi	油差し	lubricator, oil feeder
abura-seizyôki	油清浄機	oil purifier, oil cleaner
abura-sikenki	油試験機	oil tester
aburasiken-kokku	油試験コック	oil sampling cock
abura-sukui	油すくい	oil dipper, oil skipper
abura-tanku	油タンク	oil tank
abura-tanku-sen	油タンク船	oil tanker, oil carrier
abura-toisi	油といし	oilstone
aburatubo	油つぼ	oil cup, oil pot

aburauke	油受	oil catcher, oil pan, oil receiver
abura-wanisu	油ワニス	oil varnish
abura-yakiire	油焼入れ	oil-quenching
Acme-nezi	→Akume-nezi	
Adamson...	→Adamuson...	
Adamuson-ringu	アダムソンリング	Adamson's ring
Adamuson-tugite	アダムソン継手	Adamson joint
adaputa	アダプタ	adapter
aen	亜鉛	zinc
aen-mekki	亜鉛めっき	galvanization, [zinc] galvanizing zincing
aen-mekki-kôhan	亜鉛めっき鋼板	galvanized sheet iron
aen-mekki-kôsen	亜鉛めっき鋼線	galvanized steel wire
aen-mekki-tetu	亜鉛めっき鉄	galvanized iron
aen-yaki	亜鉛焼	sherardizing
agari-daiwaku	上り台わく【自動車】	swept-up frame
agaridome	揚り止め【連結器】	trigger
agekaesiki	揚げ返し機	re-reeling machine
age-tappu	上げタツプ	bottoming hand tap
ahure	あふれ	overflow
ahureben	あふれ弁	overflow valve
ahurekan	あふれ管	overflow pipe
ahure-sokudo	あふれ速度	flooding velocity
ahurezeki	あふれぜき	overflow weir
ahutabâna	アフタバーナ	afterburner
ai-boruto	アイボルト	eyebolt
ai-hukku	アイフック	eyehook
aikugi	合くぎ【機械】	dowel, joggle, peg
ai-natto	アイナット	eyenut
airisu-sibori	アイリス絞り	iris diaphragm
akamizai	赤味材	heart wood
akesugi	あけ過ぎ	over-open
akkon	圧こん	impression, indentation
âku	アーク	arc, electric arc
âku-anteisôti	アーク安定装置	arc stabilizer
âku-anteizai	アーク安定剤	arc stabilizer
âku-den'atu	アーク電圧【溶接】	arc voltage, welding arc voltage

aku-hasseitan	アーク発生端	arc end [of electrode]
Akume-nezi	アクメねじ	Acme thread
aku no nagasa	アークの長さ	arc length
aku-ro	アーク炉	arc furnace, electric arc furnace
aku-rôzuke	アークろう付	arc brazing
aku-yôsetu	アーク溶接	arc welding, electric arc welding
akyôseki	亜共析	hypoeutectoid
akyumurêta	アキュムレータ	accumulator
ama	亜麻	flax
amarizai	余り材	redundant member
Amerika-nezi	アメリカねじ	U. S. standard screw thread
amiageki	網上げ機	net hauler
amibari	編み針	knitting needle
amido	網戸	window screen
ami-iri-garasu	網入りガラス	wire glass, wired glass
amikumisen	編組み線	braided wire
âmu	アーム	arm, limb
anaakeki	穴あけ機	perforator
anagome	穴込め	tamping
ana-kizyun-siki	穴基準式	basic bore system, basic hole system, hole base system, unit bore system
ananuki	穴抜き	piercing
anasutigumâto	アナステグマート	anastigmat
ana-tagane	穴たがね	gouge
anba	アンバ	invar
anbako	暗箱	camera
anbiru	アンビル【測定】	anvil
anbiru-burokku	アンビルブロック 【さく岩機】	anvil block
andakatto	アンドカット	undercut
aneroido-kiatukei	アネロイド気圧計	aneroid barometer
anguru-ben	アングル弁	angle valve
anguru-haguruma	アングル歯車	angle gear
anguru-kokku	アングルコック	angle cock